

済南道中の三

六月二日の午前、工業学校に行って金線泉を見ました。この日はちょうど雨が降っていて、わたしたちはしばらく雨がやんだ隙に、湿り切った青草を踏んで、石池の傍まで行き、老残の様子を真似て頭を傾げてよくよく水面を見ましたが、結局金線は見え、ただたくさんの水疱が、一連一連真珠のように繋がって、あるいは水銀の蒸気と言った方がよいかもしれませんが、石の隙間から真っ直ぐに上がってきて、まるで地下に幾つも丹炉があつて、そこで丹薬を煉っているかのようでした。池の底にはたくさんの植物が生えていて、竹や柏や、名の知らぬ花木、それに一株のバラで、咲いてしまった花萼をつけたままのがありました。こうした植物が水底に生えていて、枝葉は青く、陸上と同じようでしたが、いったいどういう事なのか分かりません。金線泉の近辺には、陳遵が客を留めるために轄を投げた井戸〔陳遵は漢代の人、人を集めて酒を飲むのが大好きで、客の車の轄を外して井戸に投げ込み帰れないようにしたという逸話が『漢書』にある。〕がありますが、今はただ六尺ほどの四角い池で、轄は投げられますが、投げてもうすぐに取り出せます。次いで趵突泉に行き、大池の真中に三本の泉水が上に噴出していました。『老残遊記』によると水面から二三尺の高さに飛び出すということですが、わたしたちが見たのは一尺ほどにすぎません。池の水は雨後でとても濁っていて、“汨汨として声あり”のように流れず、加えて周囲の石橋石路それに茶館の類が、どこか故郷の脂溝漚べきべきに似ているように思います。——伝説では越王の宮女が脂粉の水を流したのが、ここに集まったということですが、いまは俗称“猪狗漚”で、郷村の航船の集合地となっています。それからわたしたちは商埠に行って公園に遊びましたが、門を入るなり又雨が土砂降り、茶亭に長らく坐り、晴れるのを待ってまた遊覧しました。公園には他に客がなく、わたしたち三人が全園を独占できたのも、とても面白い事でした。公園はもともとそれほど大きくはなかったので、すぐに遊びも終わり、園内には別に名勝古跡もなく、全てが人工の新設でしたが、一つ大きな建物があつて、入り口に扁額がかかっている、暢趣游情、馬良撰并て書と大書してあつて、わたしは長らく瞻仰しました。以前は馬良將軍はただなんとか拳が上手いだけの人だと思っていたのですが、いまはじめてとても風雅の趣味がある人だと分かって、わたしの当初の粗忽を詫びざるを得なくなったのです。

このほか他所には遊覧に行ったことはありませんが、済南という所はもう十分わたしの気に入りました。北京もよいと思いますが、ただあまりに風と塵土が多すぎます。済南にはそれがあります。済南はとても江南の風味がありますが、わたしの嫌いなあの東南の気象はないようです。（あるいはいささか速断に近いかもしれませんが、）だからすこぶる愉快な所なのです。しかしながら端午が近づいていますので、急いで北京に帰らざるを得ません。そこで五日の午前二時について急行列車に乗り済南を発ちました。

わたしは済南に四日いて、講演を八度やりました。範囲も題目もみな自分が決めたもので、もともとそれだけでも極めて自由でしたが、いろいろ考えてみてもどうしても何も言うことがないと思ひまして、無理やりいくつか題目をこさえましたが、どれも十分な目論見があつたわけではなく、話したこととなつては、句々確実であるわけには行かず、句々ほんとうの気持ちを表現でき

ているかは、むろん言うまでもありません。ふだんの談話でさえ、いつも自分の言うことは虚しいもので、心情とぴったり呼応していないと思ひ、言った途端にそれが分かって、まるで石鹸を噛んだような、気持ちの悪い寂寞を感じます。石川啄木の歌の一つに次のようながあります。

何となく

自分を嘘のかたまりの如く思ひて、
目をばつぶれる。〔『悲しき玩具』〕

こうした感覚は、実に何度も経験しました。この八つの題目のうち、ただ最後の“神話の趣味”だけはまだ比較的よいと思います。これは神話についてさらに心得があったというのではなく、ただ世間がこの問題に対して誤解が多いからに他なりません。公刊された文章から見れば、ほとんどまだ相当の理解を持った人がいませんから、わたしは自分の意見に対してまだ疑問は持っていませんし、少しばかり話してもよいかと思ったのです。神話の運命はとても夢と似たところがあると思います。野蛮人は夢をほんとうだと思ひ、半開化人は夢を兆しだと考え、“文明人”は夢を幻だと考えますが、現代の学者の手の中では、全人格的な非意識の顕現ということになります。神話も宗教的な、“哲学的な”および“科学的な”解釈を経たのち、人類学者によって救出され、その原始人の文学という本来の地位に還元されました。中国ではいまでも鬼神が夢に託し魂魄が夢に入ることを信じる人、夢を求めて夢を占う人、夢は妖妄だと言う人がいますが、夢からその人の感情あるいは感覚の分子を探り出し、もし“満願の夢”ならば、さらにその隠れた動機を求め、学術的な研究をしようとする者はいません。神話に言及すると、信じて受容するのでなければ排斥で、その態度はまさしく一致しています。わたしの見るところでは多くの神話に反対する人は科学を標榜しながら、その実その考えは神話は、もし力を尽くして抵抗するのでなければ、確かに信じて受容する可能性ありと思っているのです。これはまさに性意識の頑強な道学者が色情を戒めることを提唱するのと同じで、実際は両極が遇っているのです。ほんとうの科学者は自身が軽々しく信じないうに、また専ら攻撃を用いる必要もなく、ただ冷静に研究すればよいので、だから懐疑と寛容は必要な精神なのです。でなければ狂信者の態度になります。イエスを非とする者はやはり一種の教徒ですし、孔子を非とする者もやはり一種の儒者で、類例はとても多いのです。例えば近ごろのタゴールに反対する運動もそうです。彼らは自分で科学思想と西洋化は是だと思ひていますが、懐疑と寛容の精神を欠いていますから、実際は相変わらず東洋式の異端攻撃なのです。もし東方文化の中に最大の害毒があるとすれば、こうした専制の狂信が必ずその一つです。思はず話がまた外れてしまい、済南とはもうなんの関係もないので、ここで筆を置きます。神話の問題については、話し出すとまったくどくなるので、後日改めてということにしましょう。六月十日、北京にて書す。

※初出：1924年6月20日『晨报副刊』